新自由主義と脱成長をやめる

平成の 30 年間、日本経済はほとんど成長しなかった。
近年、「脱成長」社会を目指せなどという議論が人気を博しているが、今さら、目指すも何も、平成の 30 年間は「脱成長」社会そのものだったのである。そして、その「脱成長」社会を実現したのは、皮肉なことに、「成長」を目指して推進された新自由主義に基づく構造改革であった。
平成の構造改革が成し遂げたのは、「脱成長」社会だけではない。格差の拡大、自殺率の増加、雇用の不安定化、賃金の低迷、少子化、地方の衰退、科学研究水準の低下など、平成になる前まではさほど意識されていなかった問題までもが起きるようになったのである。
しかも、平成の 30 年の間、これらの問題が次々と顕在化していったにもかかわらず、それを是正することはできなかった。むしろ、悪化していったのである。平成の時代は、「失われた 30 年」と呼ばれるようになった。
改革を断行しなかったことではなく、改革を断行したことが問題だったのである。これは、実に恐ろしいことではないだろうか。
要するに、多くの日本人が共有する思想や世界観といったものの何かが、根本的に間違っていたのである。そうでもなければ、このような恐るべき事態にはなるはずがない。
だとするならば、令和の時代を担っていこうとする日本人にとって最優先に必要なことは、平成の時代の日本人が＝然のように抱いていた思想や世界観を懐疑し、そして批判することであろう。
―「プロローグ」より

岸田首相が提起した「新自由主義からの脱却」「分配と成長」「新しい資本主義」。

いずれも重要な方向性だが、これらを実現するための条件は何か。

本来であれば格差問題の解決に取り組むべきリベラルが、なぜ「新自由主義」を利するよ

うな「脱成長」論の罠にはまるのか。

自由主義の旗手アメリカは、覇権の衰えとともにどこに向かうのか。

グローバリズムとナショナリズムのあるべきバランスはどのようなものか。

コロナ禍を機に、先進諸国がこぞって積極財政に転換、社会主義的ともいえる政策を実施

するにいたった状況をどう捉えるべきか。

目次情報】

プロローグ　新自由主義と脱成長をもうやめる（中野剛志）

Ⅰ　成長と分配の好循環は可能か

「脱成長」論が実は「経済成長」を導いてしまう逆説／ＭＭＴをめぐる議論で欠けている「供給力」の視点／経産省が「産業政策の再評価」に舵を切った理由／欧州「移民受け入れ」で国が壊れた４ステップ／ブレグジットに反対する「エニウェア族」の正体

第Ⅱ部　自由の旗手アメリカの行く末

アメリカは「神の国」行きの巨大な列車だ／「超時空国家アメリカ」を生み出す原動力／「ナショナリズム」が守る「自由と民主主義」／「建国の父」を自己批判したアメリカの保守／民主主義は「結論ありき」でこそ機能する／「トランプ」を動かしたイスラエルの哲学者／アメリカは本当に「反グローバル化」に向かうか／「中国の脅威」なしにアメリカは復活しない

第Ⅲ部　コロナ禍以後の国家と世界

「専門家会議は経済無視」という的外れの批判／コロナ危機が導く「グローバリズム以後」の世界／観光を成長戦略にする政策はもうやめるべきだ／感染症とボディ・ポリティ

ック／プーチンが覚醒させた世界各国のナショナリズム／「九条論者」と瓜二つの「核武装論者」

内容はよいがタイトルが良くない。

本書の骨子は新自由主義のような GDP のみを目的とした効率をもとめ、無駄を廃除した成長追及が成長を阻害し、

民主主義を破壊し、

脱成長思想のような分配と人々の生活の豊かさや、やりたいことの追求、

コミュニティの形成を重視すると、

民主主義も経済運営もうまくいき、必然経済成長してしまうだろう、というもの。

ここが非常に面白いのだが、

このタイトルでは脱成長論を否定しているようにしか見えない。

敵は新自由主義なのだとはっきりさせた方が良い。

労働者の安定的な賃金や雇用は担保されない場合も想定されるし、

景気が良すぎてバブル化した場合、

インフレ時の引き締めでは雇用を逆に棄損するのではという懸念から生ずるものだと私は理解しているが、

素人目からみてもそういう理解のある人はいない。

その点、読んでいてこれでは誤解を招くなと思った。

登壇者は相当賢いと思うのだが、

やはり日本で読める文献が少なすぎて一冊しかまともな翻訳本が出ていない段階で議論するのはいささか拙速だったように思う。

あとは 2 章の MMT についての議論がイマイチ浅い部分があると思う。

MMT は必要な投資や供給力を作るための裁量的な財政政策を否定するのではなく、

財政支出で景気を上げる、というような裁量的な景気刺激策を否定している。

さらに GDP を肯定するのは左翼的な設計主義などではなく、

市場経済を通じた分配では経済成長したとしてもトリクルダウンと同じ発想で、企業と株主が儲かるだけで、

労働者の安定的な賃金や雇用は担保されない場合も想定されるし、

景気が良すぎてバブル化した場合、

インフレ時の引き締めでは雇用を逆に棄損するのではという懸念から生ずるものだと私は理解しているが、

素人目からみてもそういう理解のある人はいない。

その点、読んでいてこれでは誤解を招くなと思った。

登壇者は相当賢いと思うのだが、

やはり日本で読める文献が少なすぎて一冊しかまともな翻訳本が出ていない段階で議論するのはいささか拙速だったように思う。

中野剛士さんは、識者との対話を通じ「富国と強兵」の必要性を訴える。そして、こんな危機でも新自由主義から転換できない日本を憂う。

だから、本書に一貫するメッセージは、直ぐに新自由主義と脱成長を止め、大きな政府と積極財政に転じようというもの。

ファンタジー国家・アメリカを題材に論じるリベラリズムと新自由主義の関係は深淵。いずれにしても、コロナと中国の脅威に晒されたアメリカは、ファンタジー国家ゆえに、新自由主義ナショナリズムに転じることができた。

しかし、新自由主義にうんざりしても変われないのが日本。その理由について、中野剛士さんと識者は、戦時積極財政の記憶を持つ左翼の存在を指摘する。しかも、民主主義に必要な分厚い中間層も不在で大きな政府も積極財政も望めないのだと。

話題は、積極財政を支える MMT にも及ぶ。曰く「供給力の視点を欠く」と。その論理構

成は、投資（公共投資も）が供給力を高めるのだが、そもそも MMT には就業保証プログラム→信用創造しか念頭になく、それでは供給力を増やせないのだと。

このように日本を取り巻く状況は厳しい。だから、今こそ大きな政府と積極財政をと訴える。しかし、そうならない日本のジレンマ。中野剛士さんの視線は相変わらず厳しい。

現下の日本の経済政策がいかに間違っているか、真に追及すべき政策はなにか深く考えさせられます。文明論的な観点から新しい価値観を提示して頂いています。日本の将来を背負うことになるこれからの若い人たちに是非読んで欲しいと思います。